

關々春色長。

咲初る花にしむかふ折々はなをはたしのぶみよしのの山

再用前韵報 丹 直 清

翰墨銷春常掩扉。瓊瑤忽至照人衣。尙思嘉會煙霞晚。倅儻獨携餘興歸。

一、三月盡

かさなれる春の光のなかりせばいかに忍ばんけふの夕暮あはれなり春の月日は小車のめぐるも早き心ちのみして

一、羈旅西下の歌

五月三日菊地武康被贈離別の歌一首

詠やる程は雲井にへだつともそら行月に思ひおこせよ

予翌日歸郷首途す。今朝旅窓の障子に書付く。

こゝろあらば旅ねの床に通ひ来てうき夢さませ軒の松風

又

わするべき雲井ならねど久方の空行く月に猶もしのぼめ

巢鴨を出て行けば、左に富士の根はるかに見ゆ。

詠れば更にたぐひもなつ草の緑につゞく富士のしら雪

とある松蔭にしばしやすらひけるに、琴韻の響も旅窓

にて聞きなれたる心地しければ。

道の邊の松の木蔭に休らひてありし軒端を思ひこそやれ

碓氷の坂茶店亭主、土屋縫殿左衛門方違といふ。凡彼

亭に休する事旅行の度毎也。依て往年の事などあらま

しに及び、立出るとてかくなん書きつけてあたへぬ。

契おく露のやどりの管衣かさねても着む旅はしらねど

一、毎月廿八日の出仕

毎月廿八日江戸表は出仕麻上下也。御當地も貞享三年迄は

麻上下着用の所、五月廿八日被仰出候は、向後於御當地は

可爲常服、於江戸は可爲麻上下候云々。大猷院様御代、今

日の御目見は可被差上旨、御沙汰有之候處に、東叡山の南

光坊佛家の説を以て、今日は二十八宿を表したる事に候間、

御目見有之可然旨申に因て、爾今相止不申候。然れば江戸

表の儀は格別に候。既に今日前々より御目見無之上は、可

爲常服旨云々御詔有之候。

一、前田利次十三回忌の規式

七夕富山龍光院殿十三回忌御使者、御馬廻頭笹原六郎左衛

門二三日前罷越候。六郎左衛門儀於富山、前々の通り御名

代の御焼香、可相勤やの趣達御聽候處、此度の儀御名代と

有之儀に候はゞ、御使者柄重き筈に候。只御使者を以て御

香奠罷遣と申ものに候。然ば御名代御焼香可相勤儀にては

無之候。且又御名代御焼香相勤儀に候はゞ、七夕出仕の面

々、於御前鬘斗鯉頂戴の事も不相應に候。されば此度の儀

は、先づ前々の通り可仕旨、年寄中迄被仰出候。

一、平田内匠の職原抄註

極月十六日平田内匠大允職俊、兼々被命候職原抄に註を致

し、十二卷として獻之。凡惟受一人之秘事までも悉く注之、

殊に極秘之事一卷を添之候旨、奥村惠輝に就き獻之。十七

日御目見之上、爲御褒美判金五枚・時服二領賜之。

一、善導寺花見の歌

四年丁卯三月四日、善導寺の花盛なりとて、皆人まうづる

よし聞え侍りけるに、やつがれはまかるべき暇もあらず、

且は人目多からん所に、立ちまじはり侍らんもはゞかりあ

りぬ。幸に今朝いとまありて、しかも雨そゞぎ、往還のわ

づらひあれば、まうづる人もおほかるまじとおもひたち侍

りけるに、みる人ひとりもなくて、花も漸く散過ぎければ、

おもひつゞけ侍りける。

尋ね来てひとりみてらの庭の面に散しく花の影ぞ淋しき

春風の音にもたてし花なれどちりにし庭はとふ人ぞなき

所から常なき風の中のおもへとてしも花はちるらめ

七日直江谷の花爲一見、車の寺に立寄りて直江の花に

對して。

櫻ばなたれ忍べとて深山邊にうゑけん人のむかし戀しき

あはれいふ猶いく春か忍ばましやゝちり初めて花の面影

一、日野資茂卿を悼む歌

日野中納言資茂卿當七月逝去の所、御父大納言弘資卿八月

廿六日薨逝のよし、後藤演乘訃音到來、不堪愁涙。弘資卿

御事は、比年愚詠の批點も仰申、旁舊好有之齋陶無他。中

院大納言通茂卿追悼の和歌左の通り也。

末遠く契りし和歌の浦千鳥しらすはかなき跡とはんとは

予にも志を述べよと、光英がすゝめも難默止て。

名

袖にのみかけてぞ忍ぶ昔かなたちもかへらぬ和歌の浦波

あはれ世ははかなかりけり白露の消し草葉に跡も止めず